文芸欄

俳句

宝愛句らぶ（中央区）
遠い日の一家団欒鍋囲む　和子
夕陽差す波間にゆらり水鳥や　悦子
街行けばまばゆいばかり聖夜かな　千枝子
寄鍋の最後はうどんくたくたに　道子
同じ道歩めど季あり冬の薔薇　丘
鍋焼の箸八本の競い合い　和志

梅の美会（兵庫区）
仲の良き友は施設へ年惜しむ　藤井　歌子
届きたる信州りんご味はよし　山口　茂子
くつ下を重ね履きする霜の朝　山田　朝子
紅白梅しだれて寄り添う庭静か　粟野　富江
年女寒さに負けずパター振る　藤田ユイ子

高原ささゆり会（北区）
ペットボトル枕にうたた寝災暑かな　南　久美子
朝の風懐古ふつふつ金木犀　松村二三枝
蝉の鳴く声落ちついて夏の夕　中山　武子
水を打つ僧を迎える五分前　笠井　照子
天秤にかける命とクーラー代　尾崎　順子

ひまわり句会（北区）
知らぬ間に米寿迎えて年あらた　石井　敏子
餅つきや顔にも白き粉つけて　辻　寿賀子

ひよどり台句会（北区）
コスモスが早咲き遅咲き一斉に　塩見　光子
花野きて雲海下に空青し　田中　弘子
山茶花の咲き初む中を柩車行く　中井　光子
ナースみな同じに見ゆるマスクかな　矢谷登美子

北斗句会（北区）
この先は静かな余生花八つ手　黒田　久江
余生とはいつよりのこと花八つ手　久松　礼子
手造りの紙の長靴サンタ待つ　増田　嗣夫
寄り添いて母待つ子供花八つ手　秋山　弘之
産土の氏子総出の年用意　岸下　正二
さびしかり主なき庭の花八つ手　松本　洋子

見山台新樹会（北区）
猪鍋や〆は店主の塩むすび　貞永　弘子
陽ざし受け体軟らぐ秋日和　松隈　弘子
時鳥鳴くや物音しない村　石本　宏一
秋雨の午後スカイプの長電話　高石　勝行
かまきりや腹一杯に卵抱き　佐溝満喜子

桃山台クラブ文芸部（垂水区）
鳶ふかれふかれ船家の裏の春　田畑美恵子
深き空惜しむ間もなし虎落笛（もがりぶえ）　大上　昭敏

◆個人
五月晴れだんじり噺響く社　(東)　北田　建樹
夕焼けやかじかむ頭一句出ず　(灘)　都倉　知子
石蕗咲いていつもの門に足とどむ　(灘)　福井　悦子
音たてて風の足跡枯葉舞う　(灘)　安田奈美江
穏やかな家族の会話松の内　(灘)　山上　幸子
雛まつり幼きころの舞扇　(中)　朝岡　俊之
田舎道昔日想う彼岸花　(北)　喜田　浩
寒稽古面をかぶれば声変り　(北)　馬場みつえ
凧あげや白き雲飛び子らの声　(北)　山田キミ子
縁側の猫の薄目や小六月　(須)　福本　和恵
子か孫か今年も逢えたジョウビタキ　(西)　北野　公昭
落ち椿両掌温め持ち帰る　(西)　寺岡　洋子

川柳

桂木ひふみ会（北区）
マイライフ風の流れに沿ったまで　荒木　宗Q
春一番夢と希望をつれてくる　京念久美子
流れ雲小鳥の行方目を凝らす　杉尾　悦子
どこにもいる先輩風の嫌な人　大和ケント

高原ささゆり会（北区）
見上げれば愛しむ光恵の風　かんいち
新札にまだ出会えない古財布　かなめ

筑栄会（北区）
愚痴ひとつ種に加えておでん炊く　あきら
歳を経て煩悩消える除夜の鐘　かほう
夜の空街の灯りは万華鏡　かをる
来たんだね車が空を飛ぶ時代　勢　似
フイに出た涙はふかず空を見る　まさこ
久々に金のなる木に蕾付く　三　茶
パン食べて飯はまだかと問う夫　ぽ　ん

◆個人
星月夜ほほなでゆく風と虫の声　(東)　早川キミエ
冬ふるえ夏ぐったりこれ卒寿　(東)　増田　芳之
わざありのグランドゴルフブービー賞　(灘)　菅原　知香
年いくとおかずはたいたんものが美味　(北)　北野　利一
おお寒い！毎年重ね着増えてるぞ！　(北)　渡部　恭子

短歌

高原ささゆり会（北区）
コップより解き放たれたアイスティ
　流氷の海へ我を連れ行く　中井　裕子
七月の夜空に浮かぶ天ノ川
　二つの星が光輝く　箱守喜久子

花山短歌会（北区）
故郷を離れ住む君鹿児島の
　春を知らせるラインの君の　船崎めり子
初めての琵琶湖眺めて海の如く
　寄せる波見て思わず声が　礒元カヨ子
忘れもの不安の多き日々なれど
　歩くことには自信のあるわれ　山田加壽代
四季よりも二季がよいねと語り合う
　短かい秋を満喫したる　富田　夢助
太極拳くるり振り向く今まさに
　六甲山より輝く日の出　清水　惠子
春きらら弥生の庭に椅子置きて
　澄みたる初音垣根にひろう　古林　保子

◆個人
さざんかの小径に薄き冬の陽の
　待つ人もなき家路を急ぐ　(灘)　上田　節子
うず高く路上の落葉、溝、川へ
　海へと続く旅が有るかも　(北)　植田きみ子
福岡の国際マラソン観ておれば
　ちらと映りた昔の我が家　(須)　江口　啓子
さわやかな秋の風吹く庭っ辺に
　うす紫のホトトギス咲く　(垂)　堀江千生子
〝剛の池〟に河鵜の番の遊び見て
　つい長居する木製ベンチ　(西)　増田　當代
紅葉の万葉岬訪ねきて
　吟じて楽し唄って楽し　(西)　吉野　洋子

とっておきの作品

「雪柳」
【灘区】灘中央第一旬行クラブ
菅原　知香

あとがき

日ごとに春の訪れを感じる季節となりました。皆さまにとって、この一年がどのような歩みだったでしょうか。
今号では、クラブ活動の様子や、皆さまの温かいつながりをお伝えしました。楽しいひとときや学びの場が、これからも多くの方の支えとなることを願っています。
４月からは新年度が始まります。さらに活気あふれる活動を続けていきましょう。引き続き、皆さまのご協力をよろしくお願いいたします。